

<大川小 還らぬ人へ> この子だけは大人に

◎津波訴訟10月26日判決(4) 佐藤英夫さん、すえ子さん夫妻

父親が願う。

「この子には無事に生きてほしい。それだけが
望み」

母親が誓う。

「何が何でも、この子だけは大人にしてやんな
きゃ」

宮城県石巻市の佐藤英夫さん(45)と妻すえ
子さん(42)は、昨年4月に授かった男の子を
「生望(いくみ)」と名付けた。

<助かるわけねえ>

東日本大震災の津波で、石巻市大川小6年の長
女未空(みく)さん=当時(12)=と、3年の
長男択海(たくみ)君=同(9)=を失った。

子ども2人を一度に亡くした夫婦にとって、生
望ちゃん存在は「生きる望み」に他ならない。

「大川小が壊滅状態だ」。震災翌日の2011
年3月12日、英夫さんは耳を疑った。胴長をは
き、大川小へと急ぐと、校舎西側の三角地帯と呼
ばれる堤防道路近くに子どもたちの遺体が横たえ
られていた。



未空さん



択海君



笑顔で遊ぶ生望ちゃん。笑った目元が姉に似て

子どもたちの顔にはハンカチが掛けられていた。英夫さんが「これじゃ助かるわけねえ」
と絶句する傍らで、別の父親が泣き叫んでいた。

遺体捜索から間もなく未空さんが、約2週間後に択海君が相次いで見つかった。ともに身
長約140センチ、体重約30キロ。小さな亡きがらは手厚く葬られた。

昆虫好きの択海君が捕まえたトンボやバッタを未空さんに見せ、困らせる。きょうだい仲
良く携帯型ゲーム機で遊ぶ。ありふれた日常が突然、消えた。

<形見も心の支え>

3月11日、大川小前で市の広報車が「津波が松原を越えてきました。避難してくださ
い」と警告したのは午後3時25分ごろ。大川小が津波に襲われるまでまだ約10分、避難
の時間が残されていた。

「未曾有の災害だから子どもたちが死んだ、で終わったのでは到底納得できない。男の子
が『逃げよう』と言っていた裏山など、より高い場所へ、なぜ避難しなかったのか」

大川小の「悲劇」が想定外で済まされれば、第二、第三の大川小が出てしまう。佐藤さん
夫婦は訴訟の原告に加わった。

「妊娠しています」。提訴から数カ月後、朗報が届いた。現在、1歳半になった生望ちゃ
んは身長約80センチ、体重約11キロ。笑った目元は姉にそっくりだ。

動物の本でライオンを見つけると「ガオー」。ゴリラのページでは、両手で胸をたたく。
本の裏表紙の氏名欄に書かれた「さとうたくみ」という、会えなかった兄の存在をいつか知
る日が訪れる。

未空さんは震災直前、授業で親への感謝の手紙を書いた。「今までお世話になりました。
育ててくれてありがとう」

択海君は震災前の10年夏、折り紙で作った七夕飾りに「家族がしあわせでいられますよ
うに」と書いてくれた。

震災から5年7カ月、思いがけず形見となった手紙と七夕飾りもまた、生望ちゃん同様、
夫婦にとって生きる支えでもある。